

【一】

問一 ①

えしやく

②

類似

受験番号	
得点	

③

地蔵

④

装飾

⑤

いとな

問二

I

イ

II

ウ

III

エ

問三

ほとんどが声のやりとりで終始する「耳なし芳一」の物語にあって、文字を記すことや文字を読むということに関わる場が他にないから。

問四

A

不可視

B

呪術的機能

C

視覚の変容

問五

口と耳と聴覚

問六

触覚

問七

エ

問八

芳一の身体に書き記されたお経の場合、文字は人の身体に触れるという皮膚感覚に結びついていて、文字の特質がまず記されるものであり触れるものとしてあることを表す。
一方、口頭伝承である昔話のお経や呪の場合、文字は人の身体に触れるという皮膚感覚に結びついておらず、文字が記されるものであり触れるものとしてあるという特質がないか少ないという点が「耳なし芳一」と異なる。

〈別解1〉 文字の特質として、人の身体に触れるという皮膚感覚に結びついてまず記されるものであり触れるものとしてあるということがある。

耳なし芳一」の芳一の身体に書き記されたお経の文字にその特質が表れている。一方、口頭伝承である昔話のお経や呪の場合は、「耳なし芳一」と異なり、文字にあるそのような特質がないか少ない。

〈別解2〉 文字の特質は、まず人が紙や石に触れて記されるものであるという皮膚感覚に結びついて触覚的であることであり、記された文字には触覚的痕跡が残ることである。「耳なし芳一」の場合、視覚は、耳以外の皮膚を紙として書き記されたお経の文字を捉えることができず、捉えたのは、文字が記されなかったために触覚的痕跡を残さない耳だけだったことに文字の特質が表れている。
一方、口頭伝承である昔話のお経や呪の場合は皮膚感覚に結びついておらず、触覚的痕跡を残していないという点で文字の特質がないか少ない。

問九

ア エ

問一

①

けいけい

②

ちょう

③

雰囲気

④

がんちく

⑤

密着

問二

I

オ

II

イ

III

ア

問三

①

名詞の数について明示的でない日本語においては、数を意識化することによって発見できることがある。

②

第一人称と第二人称のバリエーションが多い日本語では、IとYouしかない原語よりも、人称によって人物の性格、人間関係が浮かびあがる。

問四

名

訳

問五

①

擬

人

法

②

「かたつむり」は五音になり、「朝は七時」の七音以外はすべて五音になる。

問六

(1)

外国語を理解すること。

(2)

自国語ですぐれた表現力をもっていること。

出題の意図

「高等学校 学習指導要領 第2章 各学科に共通する各教科」（平成30年3月文部科学省告示）の「第1節 国語」「高等学校学習指導要領解説 国語編」「付録4」（平成30年3月文部科学省告示）における教科の「教科目標」「科目目標」に示された「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」から「書くこと」「読むこと」を出題した。

ただし、本学の入試においては「募集要項」にあるように近現代以降の文章として古文と漢文を出題しないことから、出題に当たっては、高等学校国語科科目のうち、「現代の国語」（共通必修科目）、「言語文化」（共通必修科目）から「近代以降の文章」、「論理国語」（選択科目）「国語表現」（選択科目）を対象科目としている。したがって「文学国語」「古典探究」は対象としていない。各期すべてにおいて、近代以降の評論文・論説文を「読むこと」を中心に据えて「書くこと」を必要に応じて取り入れ、大問2題の出題を基本としている。

教育学部と国際教養学部の「国語」問題が共通であることを踏まえ、評論文・論説文の内容を選択するに当たっては両学部のアドミッションポリシーを参考にしている。各学部のアドミッションポリシーのうち、教育学部における「国際的な視野に立ち、高等学校までの教科・科目や学校の諸活動を通じた学びで身につけた、基本的な学力、知識を有し」ていること、国際教養学部における「人間やその営為に対して幅広い関心を有すること」と「現代社会における課題の発見と解決に積極的に貢献しようとする意欲」を重視して、幅広い専門・学術分野から選択するようにしている。